

# 秋篠家文書解読による萬福寺塔頭の研究

## Key Word

黄檗派 萬福寺  
秋篠家文書 塔頭

## 1. 研究概要

### 1-1. 研究背景と目的

黄檗派は江戸時代唯一の公認外来宗教でありながら、未だ研究者が比較的少ない分野である。さらに塔頭に関していえば、黄檗派の塔頭はあまり現存しておらず研究がそれほど進んでいない。

黄檗派寺院の貴重な史料である秋篠家文書を解読することで、本山萬福寺とその塔頭群の構成に関し解明する。

### 1-2. 研究方法

- ①黄檗派に関する資料を収集する。
- ②黄檗派寺院を調査する。
- ③黄檗派に関する詳しい史料(秋篠家文書)を解読する。
- ④③の作業で黄檗派建築の特徴を明らかにする。

## 2. 黄檗派について

### 2-1. 黄檗派の伝来

中国・明末期の国の混乱により当時の禅宗が日本に伝わり、それ以前に伝わった禅宗と区別して日本では黄檗派と呼ばれるようになった。

黄檗派の正式な伝来に先駆けて、明朝の寺院が日本で建てられた。江戸時代に唯一海外に開かれていた長崎では、中国の貿易商人が自分たちの寺を創建した。そうして建てられたのが興福寺・福濟寺・崇福寺である。中国的要素をふんだんに含むその寺は唐寺と呼ばれその存在は、当時清へと変わろうとしている明から僧侶たちの来日を促した。

そのような時代の中、承応3年(1654)に中国古刹黄檗山萬福寺(以下、古黄檗)の元住持である隠元禪師が来日した。鎖国中に海外から伝わった文化なので当初幕府は警戒していたが、明暦年間(1655~58)には積極的に擁護し、そして臨済宗黄檗派は開宗した。

表1. 黄檗派伝来の年表

| 西暦    | 出来事                         |
|-------|-----------------------------|
| 1613年 | キリシタン禁止令発布。中国華僑、唐寺創建に動き始める。 |
| 1624年 | 興福寺創建。                      |
| 1629年 | 崇福寺創建。                      |
| 1649年 | 福濟寺創建。                      |
| 1654年 | 隠元来日。                       |
| 1660年 | 幕府、宇治の寺地を隠元に与える。            |
| 1661年 | 萬福寺創建。建設開始。                 |



K05093

西野史子

### 2-2. 黄檗山萬福寺について

現在の京都府宇治市五ヶ庄三番割34に建っている。幕府から擁護を受けた隠元は、大老・酒井忠勝から宇治の広大な土地を寺地用に与えられた。そこに日本の黄檗派の大本山である黄檗山萬福寺を建てることになった。寛文元年(1661)に萬福寺の建設工事が始まった。日本人大工は唐寺を参考にしつつ古黄檗に酷似した寺を作り上げた。

萬福寺は西を南に見立ててつくられた。基本的に寺院は南側から入るようにつくられているが、この敷地は法堂・威徳殿がある東側に行くにつれ高くなる山地である。

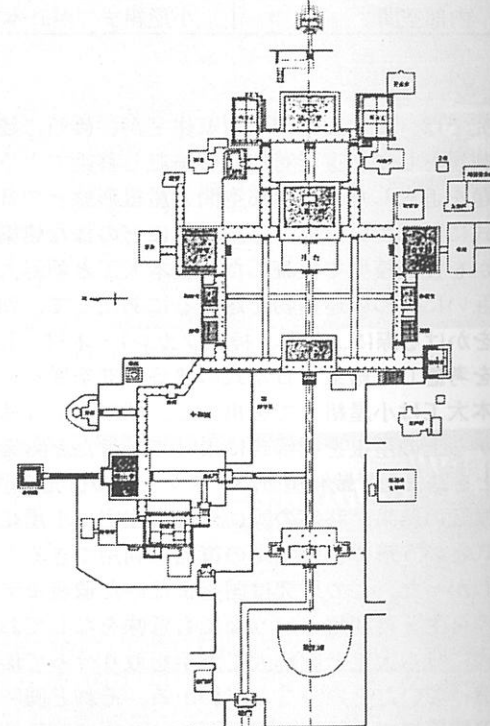


図1. 左右対称な萬福寺伽藍



図2. 蛇腹天井(黄檗天井)

萬福寺には黄檗派独特の特徴である明朝の左右均整な伽藍(図1)、三門と大雄宝殿(仏殿)の間にある天王殿の存在、ヴォールト状の蛇腹天井(図2)、円窓、卍崩しの模様などがみられる。

### 2-3. 黄檗派のその後

隠元と2代目住持木庵の時代を中心に、仙台の伊達氏など各地の有力大名の支持を受け、黄檗派の寺院が創建された。だが中国渡来僧が勤めてきた住持を日本人が担当し始めたことから、原点である古黄檗との関係が希薄になった。さらに庶民間には普及しなかったこともあり、黄檗派は江戸中期には廃れ始めた。

一方、江戸では菩提寺として黄檗派寺院が存在し続けた。当時、地方から来た出稼ぎ労働者の埋葬と寺院の不足について幕府は手を持て余していたが、新興宗教扱いである黄檗派の侵入を認めることでこの問題を解決した。そのような形で庶民のための黄檗派は存在し続けた。

## 3. 秋篠家文書について

### 3-1. 秋篠家とは

黄檗山萬福寺を担当した宮大工である。寛文八年(1688)に完成した大雄宝殿の建設に秋篠藤左衛門が棟梁として働いた記録が史料への登場だと考えられる。

### 3-2. 秋篠家文書について

秋篠家大工からの申請書と、それに可・不可の判断を下す幕府の京都中井役所のやりとりが記されている。

当時の大工支配を知るほか、建築各部材の実寸値が詳しく載っており、18世紀の大工史料として画期的である。さらに、文書を分析することで設計・施工を担当した人物が明らかになり、当時の建築生産形態が見えてくる。

本研究では宇治市役所市史編纂室に保存されている680枚分のマイクロフィルム紙焼きを収集した。文書は書誌学の整理上4部に分けられている。以下、それぞれの文書をNo.1からNo.4と呼ぶ。

### 3-3. 秋篠家文書における松隠堂と塔頭

秋篠家文書には、松隠堂と塔頭の文書が多い。また寛文年間(1661~1672)に行われた萬福寺内主要建造物の新築工事がほとんど記録されていない。なぜなら文書に載っている申請書の内容は、江戸時代中期から後期に取り扱ったものが多く、萬福寺創建と時期がずれているからだ。そのため、後年に建てられた松隠堂や萬福寺の塔頭のデータが多くを占めているのだと考えられる。

松隠堂は、隠元が萬福寺の住持を辞してからの隠居所であり、隠元の死後は彼を祀る塔頭となり、独立した開山堂などが整備された。

塔頭とは一般的に、禅宗において祖師や高僧の死後、弟子が師を称えて寺の敷地内に建てた小院である。ただし黄檗派においては高僧の隠居所として建てられ、本山に対して僧侶の住坊・宿院としての機能を果たした。黄檗僧の流派の起点としても働く。本山の祖師堂とは無関係である。

## 4. 塔頭

### 4-1. 秋篠家文書と塔頭

文書No.3の『黄檗山塔頭三十三箇所惣絵図』には松隠堂、白雲庵、萬寿院、天真院、宝蔵院、法苑院、宝善庵、緑

樹院、吸江庵、法恵院、寿泉院、別峰院、紫雲院、龍華院、鳳陽院、真光院(元幻梅院)、獅子林、崇寿院(元景福院)、華嚴院、法林院、寿光院、慈福院、華蔵院、瑞光院、杏林院、龍興院、漢松院、東林院、萬松院、長松院、慈照院、計三十三ヶ所の塔頭の平面が記載されている。記録した時期は天明八年(1788)もしくは天保十四年(1843)である。

No.4には口上書や普請願などの形で、天真院、緑樹院、白雲院、別峰院、萬寿院、大潜庵、真光院の平面図が載っている。

塔頭の平面がとってある文書の件名には『有来り』という一節が含まれる。この場合、工事予定の建造物ではなく、すでに建っている建造物の平面図を記録したことを意味する。

また、獅子林という塔頭が講元となり、修復講という建物修復のための金銭収集を行っている。

### 4-2. 萬福寺塔頭の平面

塔頭は主に客殿と庫裡で構成されている。大きく分けて、客殿庫裡として一体化したもの、客殿と庫裡がそれぞれ独立して建っているものの二つに分けられる。庫裡とは、禅宗寺院やその塔頭に設けられる建物であり、台所の役割を含む。

#### (1)客殿庫裡一体型

漢松院と吸江庵は小屋、法苑院は浴室が独立して建っているものの、基本的には方丈一つが客殿と庫裡の両方の役割を担っている場合が多い。

漢松院、吸江庵、寿光院、白雲庵、鳳陽院、慈照院、法苑院が当てはまる。

#### (2)客殿庫裡独立型

客殿は基本的には方丈形式の六室平面、庫裡は土間空間を持つ。

玄関もしくは廊下をはさんで、客殿と庫裡が接続している構成である。萬福寺の塔頭にはこのパターンの平面がとても多く、萬福寺において一般的な構造であるといえよう。紫雲院(図3)などの塔頭が当てはまる。

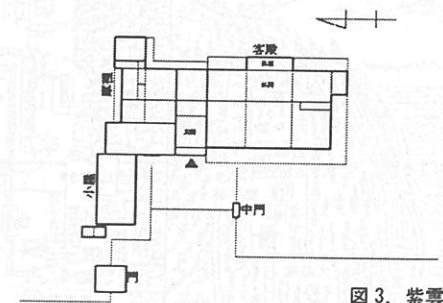


図3. 紫雲院

### 4-3. 萬福寺塔頭の変化

(1)二つの違う年代に記録された塔頭の平面を比較し推考した。

◆萬寿院…宝暦十二年(1762)から天明七年(1787)の間に、管理を担当している塔頭に金銭と労力の余裕ができた

め、開山堂が建ったと推測される。

◆天真院…享保十六年(1731)から、天明八年(1788)もしくは天保十四年(1843)の間に土蔵が三つもできた。萬福寺に隣接しているおかげで他の塔頭よりも金銭面で豊かなのではない。

◆寿泉院…天明八年(1788)の記録では仏間と生活の場があったものの、天保十四年(1843)の記録では仏間部分のみ残っている。経済的に破綻してしまい、残っているのは他の寺院が仏間を管理していたからだと考えられる。

(2)元禄十四年(1702)に成立した文書に載っていた古地図と、現代の地図を比較する。

敷地の移動に関しては以下の二点が判明した。

◆紫雲院は現在ある萬福寺の西側ではなく、華嚴院や法林院に隣接し、萬福寺の南側にあった。

◆宝蔵院は最低2回以上敷地を変えている。『黄檗宗萬福寺の塔頭について』によると、明治八年(1875)まで宝蔵院は現在の龍興院にあった。だが古地図には龍興院も宝蔵院も萬福寺の西南にある。

◆大潜庵は延享四年(1747)までに絵図の位置から別峰院の北に敷地を移動した。

#### 4-4. 萬福寺塔頭の配置と平面の関連性

それぞれの塔頭に以下の関連性がみつかった。

◆客殿と庫裡は直交する。

◆庫裡は座敷列が塔頭の入り口から奥にある。

◆塔頭への入り方は、道路の影響が大きく道路に沿って門が設けられたものが多い。別峰院・緑樹院・慈福院・紫雲院・宝善庵・瑞光院・法苑院・華嚴院・長松院・法林院・法恵院・宝蔵院・龍興院・崇寿院・大潜庵・獅子林が当てはまる。ただし、宝善庵・瑞光院・華嚴院・法

林院・長松院・宝蔵院・龍興院・崇寿院・大潜庵に関しては、建設にあたって方位に沿った入り口になるよう道路を開いた可能性がある。

◆萬福寺より南に位置する塔頭は、玄関や廊下をはさんで、南側に客殿、北側に庫裡という配置をとるものが多い。特に、客殿が南北に横長で、庫裡が東西に横長い塔頭が多い。東林院・宝善庵・瑞光院(図4)・緑樹院・慈福院・長松院・紫雲院・法林院がこのパターンに当てはまる。華嚴院も南北の位置関係については当てはまる。

◆萬福寺より東側に位置する崇寿院(図5)・龍興院・宝蔵院は、間に玄関をはさんで、北側に庫裡、南側に客殿という配置をとる。

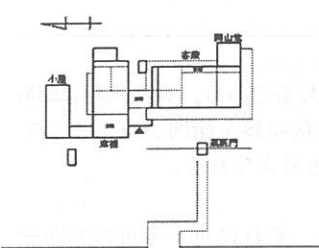


図4. 瑞光院

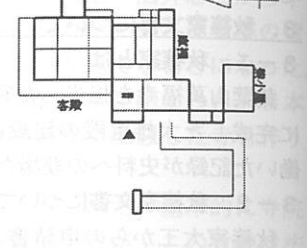


図5. 崇寿院

◆同じく東側にある崇寿院・宝蔵院・寿泉院(図6)は、門から入り、寺院本部にたどり着くまでの道のりが、何段階にも分かれている。これは山の高位が下がってゆく地形に左右されたのだと考えられる。

◆萬福寺より南側、東側に位置する塔頭は入り口が南北に長い客殿に面しており西から入る。これは萬福寺が西を南に見立てていると同様に考えているからだろう。

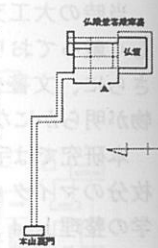


図6. 寿泉院

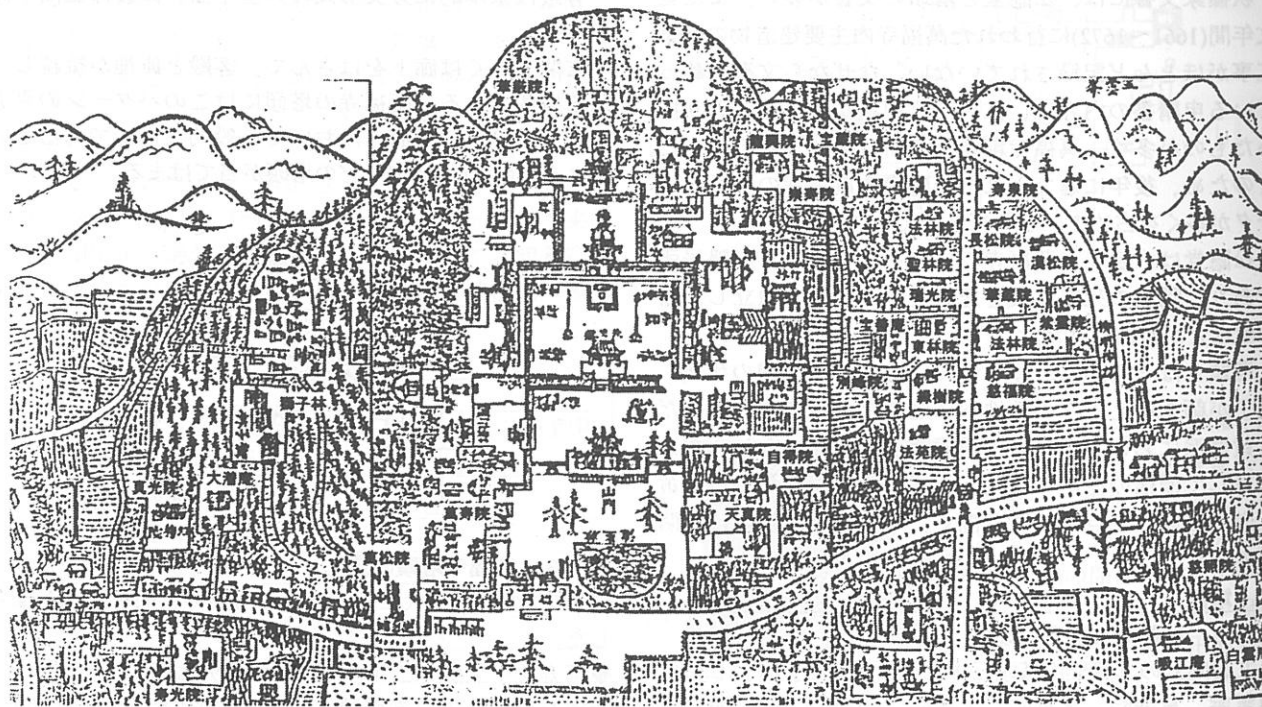


図9. 元禄十四年の萬福寺周辺絵図

◆東林院・天真院・萬寿院(図7)といった萬福寺に隣接する塔頭は萬福寺につながる向きに門が置かれている。僧侶の住坊として萬福寺から短い移動で済み利便性が高い。ただし東林院は敷地を変えているので、古地図の時期より後の時期の敷地で考えた。

◆さらに、萬寿院(図7)と天真院(図8)は萬福寺を挟んで左右対称の配置をとる。

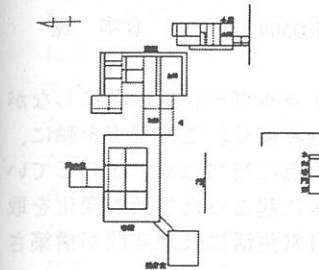


図7. 萬寿院

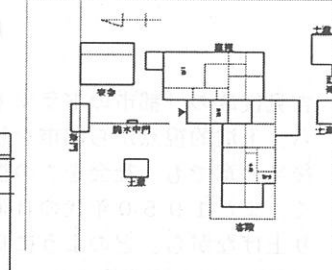


図8. 天真院

◆真光院は萬寿院(図7)と同様、萬福寺より北側に位置する。開山堂が置かれている寮を客殿とみなせば、萬寿院と正中軸に対して同じであり、さらに門が萬福寺の方を向くという共通点が見える。

◆例外

□獅子林…独立した開山堂と塔所を持っており、門が客殿ではなく開山堂を向いている。機能的には入り口が客殿に面している塔頭と同じである。

□華嚴院…萬福寺よりも東側にあるため山の裏側に位置し敷地が狭いため、入り口や客殿・庫裡の配置が異なる。

□法恵院…萬福寺から南側にある塔頭の中で客殿と庫裡の配置が異なり縁側でつながっている。貞享元年(1684)と遅く創建されたため、独特な平面になったと推測できる。



図10. 現在の萬福寺周辺地図

#### 4-5. 萬福寺塔頭の「修葺講」と経済

寛政五年(1793)に建物の修理のためのお金を集める「修葺講」が行われた。獅子林が講元、真光院・海寶寺が引受として、二十四ヶ所の塔頭を対象に行った。

修葺講では突札と花籤が発行されており、全員が当選するまで行っていた。最終的に銀一貫以上が修復費用として集められており、経済的な意味でも壇林全体をサポートしていたと考えられる。

#### 5. 結論

本山萬福寺とその塔頭群の構成に関し、次の二点で解明することができた。

##### ①空間構成

客殿と庫裡が独立している塔頭は、それぞれが直交する位置関係にある。

萬福寺の塔頭の入り口は、基本的に道路に合わせて門を置いている。それらの塔頭は、南北に横長の客殿が入り口に対して面しており、萬福寺と同様、南と見立てた西側から入る。

萬福寺に隣接した塔頭は、萬福寺の境内から入るようになっている。

萬福寺に隣接しており寺を中心に対称的な配置をとる塔頭もある。

庫裡は座敷列が入り口から奥にある。

##### ②「修葺講」による修理費の経済的支援

塔頭を始めとする二十四軒の周辺寺院により、建築修理費を平等な負担において、ねん出するための「修葺講」が実施されていた。

このようにして、ハード・ソフトの両面から本山萬福寺を中心とする壇林を巧緻に形成・運営しており、そのため江戸時代唯一の公認外来宗教として今日に至ると考えられる。

註'虹梁'にある2本の東柱が円弧状の垂木を支える天井。

#### 参考文献

- ・櫻井敏雄・大草一憲「黄檗宗寺院の伽藍計画に関する研究—法雲寺の建築と伽藍計画を中心として—」美原町史紀要『美原の歴史』特集号 1983年
- ・川上貢「宇治万福寺伽藍の造営と大工について」日本建築学会近畿支部研究報告書 1975年
- ・熊本達哉「黄檗宗萬福寺の塔頭について—開山堂と客殿に関する一考察」日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿) 1996年9月
- ・坂本博司「萬福寺の塔頭に関する覚書」黄檗文庫 第118号 1999年5月1日